



こども 歴史 なぜ なに? 相談室



闘茶札って何?

「よみがえる草戸千軒」の展示室の「遊ぶ」のコーナーに「闘茶札」という木の札が展示されています。将棋の駒の形や菱形の小さな薄い板で、「二」・「四」・「客」などの文字が墨で書いてあるようです。けれど何に使ったのかが分からない、不思議なものです。一体何に使ったのですか?

簡単に説明すると、お茶を味わい、その種類を当てる「闘茶」というゲームの道具です。中世からの遊びで、当時は「闘茶」という言葉を用いず、「飲茶勝負」「茶寄合」などと呼ばれたようです。勝ち負けをめぐるお金や品々などを賭けて行われることもあった遊びで、裕福な人々が集って楽しんだものと考えられています。

草戸千軒町遺跡から出土した闘茶札は全部で14点あり、「二」「四」「客」の他、長方形の札の両端に「本・非」「一・二」「都・鄙」などと記されたものがあります。これらは本非茶勝負や四種茶勝負で用いられた札だと考えられています。

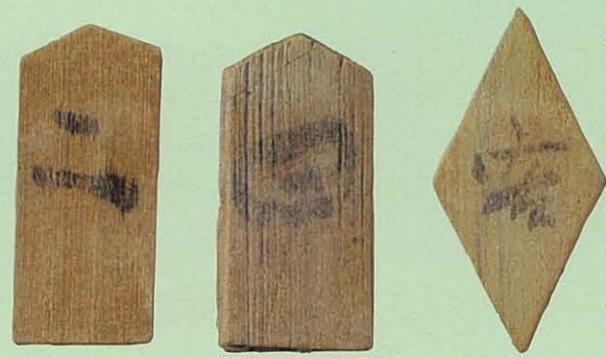
本非茶勝負は「本・非」の札を使って、京都柁尾産のお茶とそれ以外の土地で出来たお茶を飲んでどちらがどちらなのかを当てます。「都・鄙」も本非茶勝負と同様のものだったのでしょうか。「喫茶往来」(南北朝時代：1331～1392に、学僧によって書かれたと考えられている、広い意味でのお茶の参考書)には「都鄙善悪の批判(京都の柁尾茶と、そうでないお茶のよし悪しを評価する)」と記されています。

四種茶勝負には「一」「二」「三」「客」の札を使います。4種類のお茶にそれぞれの番号をあてがい、飲み当てるのです。この遊びについても『喫茶往来』に記されています。

草戸千軒で京都産の本茶が用いられていたかどうかは分かりません。ですが「本・非」「都・鄙」など、当時の都で開催された茶会で使われていた語句が、草戸千軒町遺跡から出土した闘茶札に記されていることは、文化の広がりを考えるうえでとても興味深いことです。

闘茶札は茶道の歴史を具体的に伝える貴重な出土品です。

(学芸員 周々木朝香)



闘茶札